

絵本で知る三重の文化財

海女
あ
の
ま
く
ら
し



出演：鳥羽志摩江さんとその仲間たち

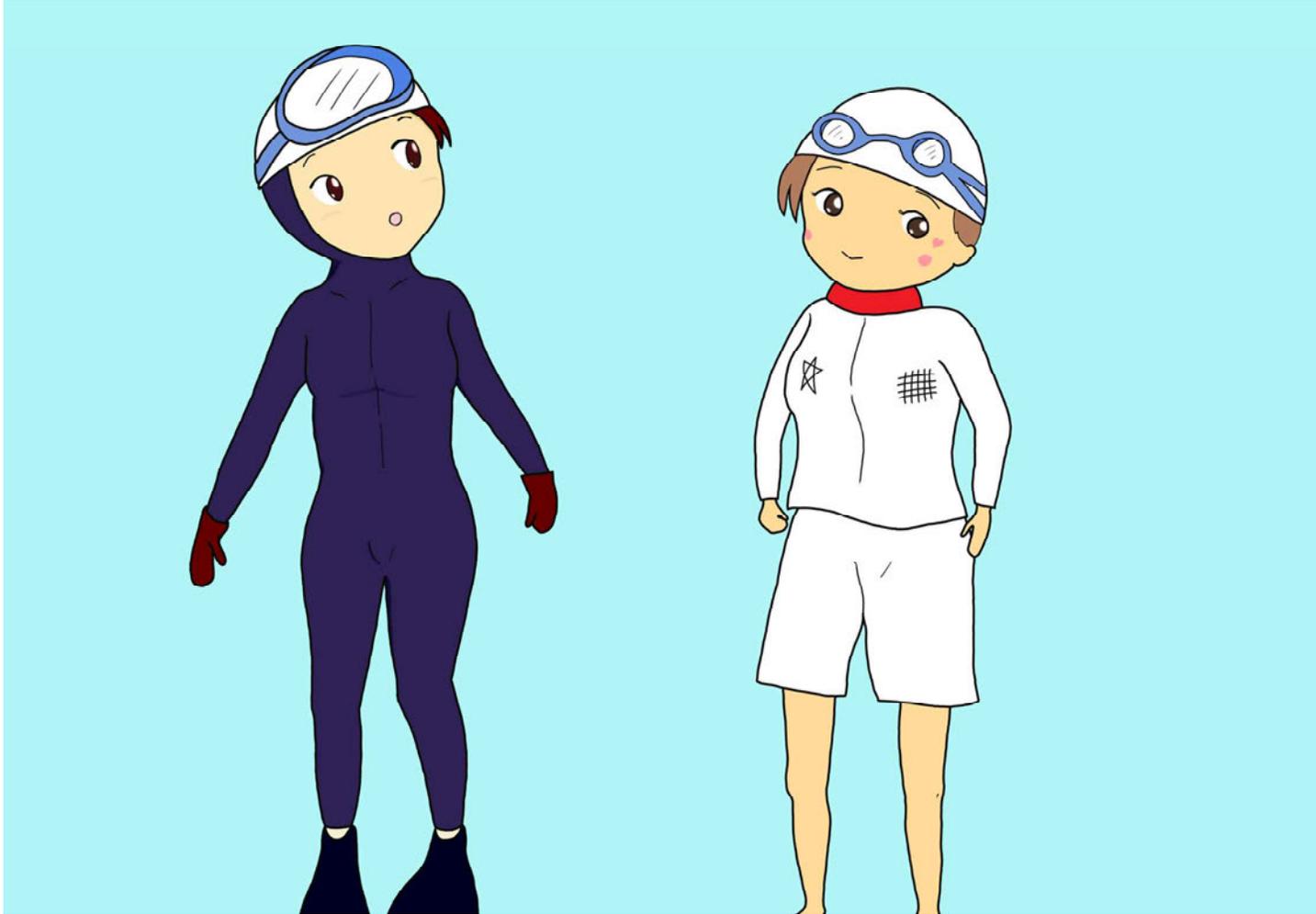


海女のくらし

皆さんは「海女」と書いて「あま」と呼ばれている人たちのことを知っていますか？

海女とは、体だけで海にもぐり、息が続く限り貝や海藻かいそうなどをとる女の人のことで、日本や韓国では、今もこの海女の仕事を続けている人がいます。

三重県鳥羽市とばや志摩市しまには、日本中でもっとも多く、海女が活躍しています。しかし、その数はだんだんと少なくなってきました、六〇年ほど前には六千人いた海女も、今では八百人を切るほどとなっています。



海女の姿の昔と今

海女が海にもぐる時、今ではウエットスーツと呼ばれる潜水用せんすいの服を着るのが普通ですが、以前は、白い「イソギ」と呼ばれる服を着ていました。さらに昔は、上半身は裸はだかで海にもぐるのも当たり前だったようです。

海の中は冷たく、体は冷えやすいので、ウエットスーツを着ないと、さぞかし寒かったと思います。海女の中には、ウエットスーツの上に、さらに「イソギ」風の白いシャツを着て、頭には白い手ぬぐいをかぶる姿も多くみられます。

「イソギ」には、実はある効果があると信じられています。このことは、また後でお話ししましょう。



舟人

徒人

舟人と徒人

現在の海女が、海で漁をする時、その方法から海女の呼び名が異なります。

一つは、船頭とともに船に乗り、より深い漁場まで船で移動し、漁をする方法です。その際、船頭とペアとなって作業する海女を「舟人（ふなど）」と呼び、何人かの海女が同じ船に乗り、漁場まで移動し、それぞれが自分たちの漁場に分かれて別々にもぐる海女たちを、「ノリアイ」と呼んだりします。

もう一つは、陸から自らの漁の場所である漁場まで泳いでいき、自力でもぐって漁をする方法で、これらの海女は、「徒人（かちど）」と呼ばれます。

とくに舟人は、合図とともに、船頭が海中で作業する海女を、船に滑車かつしやで引き上げるなど、海女が船頭の補助を受けて一〇メートル以上も深くもぐることができました。



海の中で

海女は岩場に隠^{かく}れているアワビやサザエなどをねらってもぐります。とくにアワビは一番の獲物^{えもの}なのですが、岩からはがすのが大変です。海女は息が続かないと判断したら、その場所に目印をおいて、いったん息つぎのため^{ため}に浮上し、再び目印を目指してもぐり、目当てのアワビをとりに向かいます。

アミで魚をつかまえるように、一度にたくさん^{さん}の獲物はねらえませんが、海の中を何度も往復することになります。

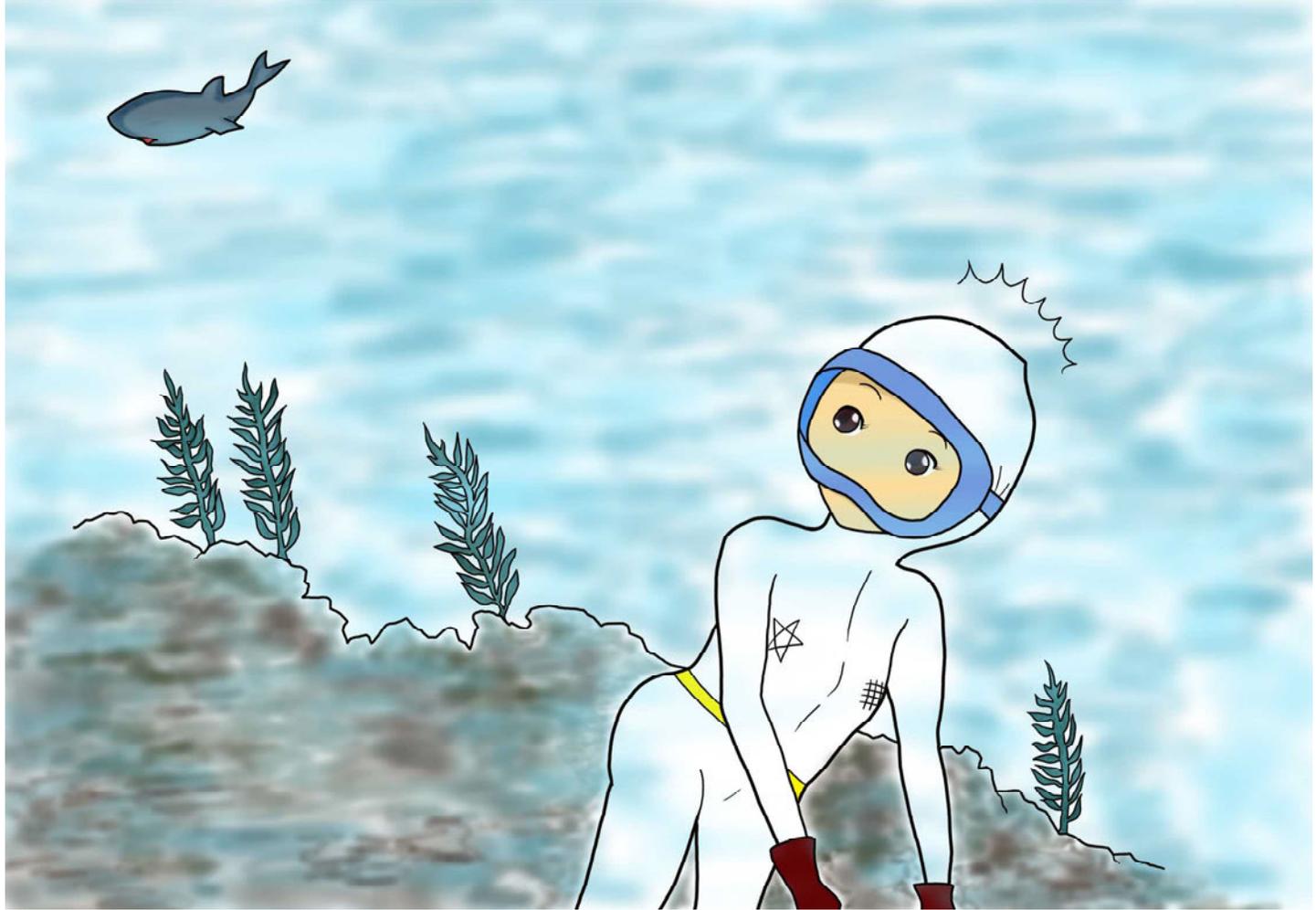


大昔の海女たち

アワビなどの海中深く、岩場に隠れた貝は、もぐってとるしか方法がありません。

では、いつ頃からそのような漁が始まったのでしょうか。

日本列島では、すでに五千年前の遺跡からアワビの貝がらやアワビをとるための道具と考えられるものがみつかっています。実は鳥羽でも、約三千年前の白浜遺跡（しらはま いせき）という遺跡から、アワビの貝がらと「アワビオコシ」と呼ばれる、鹿の角で作られたアワビをとるための道具が出土しています。



海女にせまる危険

酸素ボンベもつけず、素もぐりで漁をする海女の仕事には、いつも危険がつきものです。

もぐって浮き上がるまでの時間を自分で判断して作業を続けなければ、おぼれてしまいます。

また、海にはサメなどの危険な生き物もいます。先ほどお話をした、白い「イソギ」は、実はサメを近づけさせないという、言い伝えがあるようです。



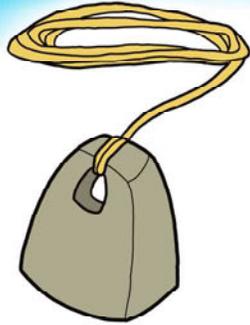
海女小屋の中で

海での作業は、体力を使いますので、浜に上がって休けいも必要です。

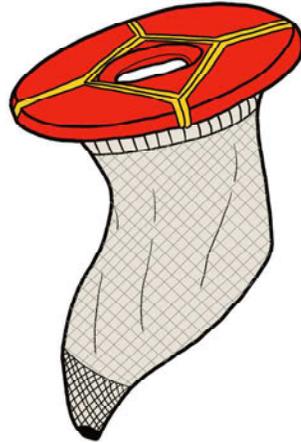
浜には、海女小屋と呼ばれる小屋が建てられ、その中で海女たちがくつろぎ、世間話に花を咲かせます。

漁の方法などについて話し合ったり、海女小屋は海女たちのコミュニケーションの場として、大切な役割を果たしています。

小屋の中では「いろり」で暖をとり、「キンコ」と呼ばれる、干しイモなどのおやつを食べたりして過ごします。



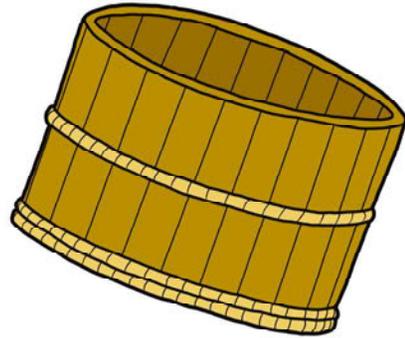
オモリ



タンポ



スンボ



イソオケ

ノミ



カギノミ

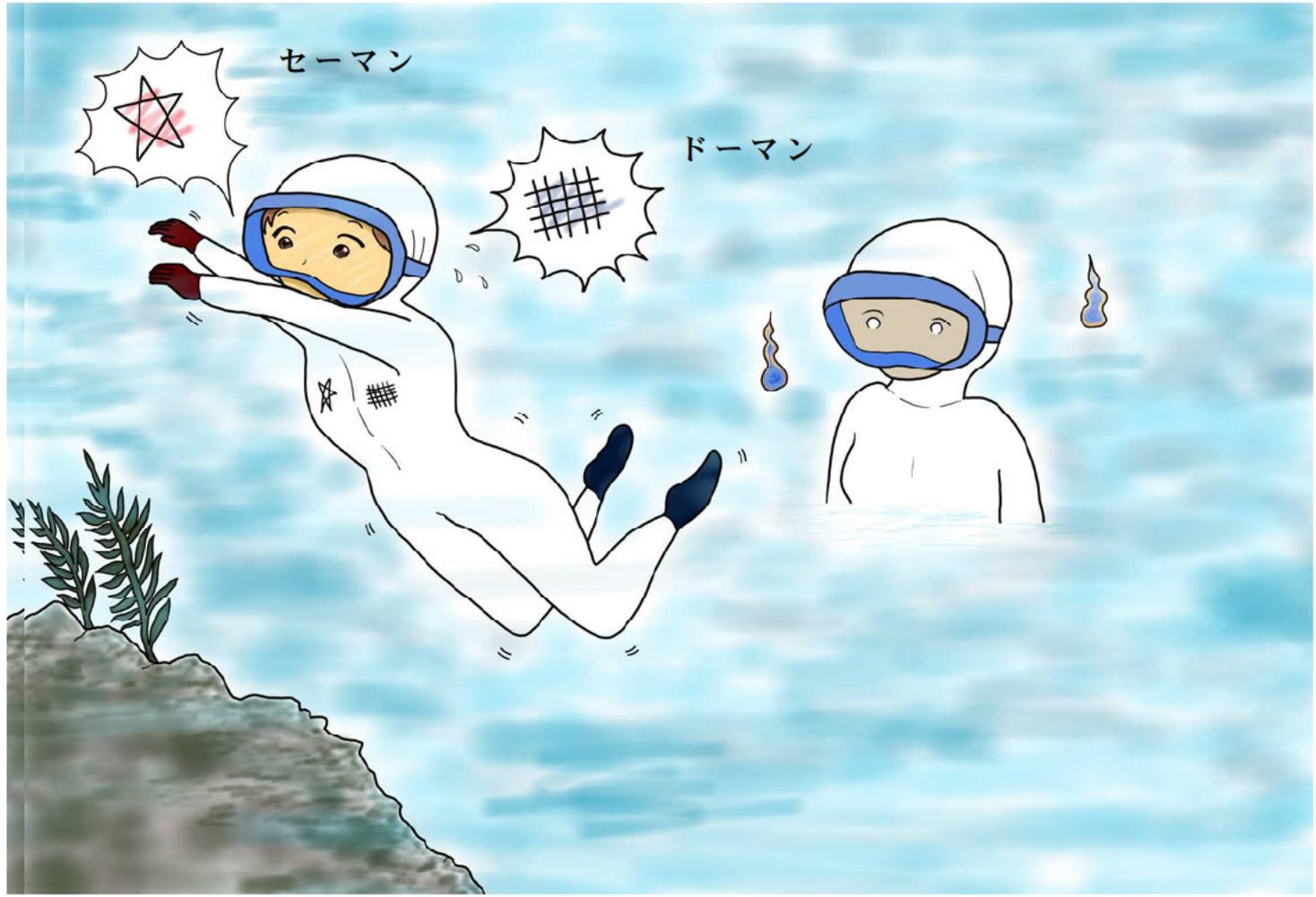


イソメガネ

海女の道具

海女はさまざまな道具を使いこなしして漁をします。「イソメガネ」と呼ばれる、水中メガネは必需品で、アワビを岩からはがすための「ノミ」や、サザエやウニをとるための「カギノミ」などの道具のほか、獲物を入れるための「イソオケ」や「タンポ」と呼ばれる、浮き輪のついたアミ袋などがあります。

また、いち早くもぐるためのオモリや、アワビの大きさを調べる「スンボ（寸棒）」といった道具もあります。

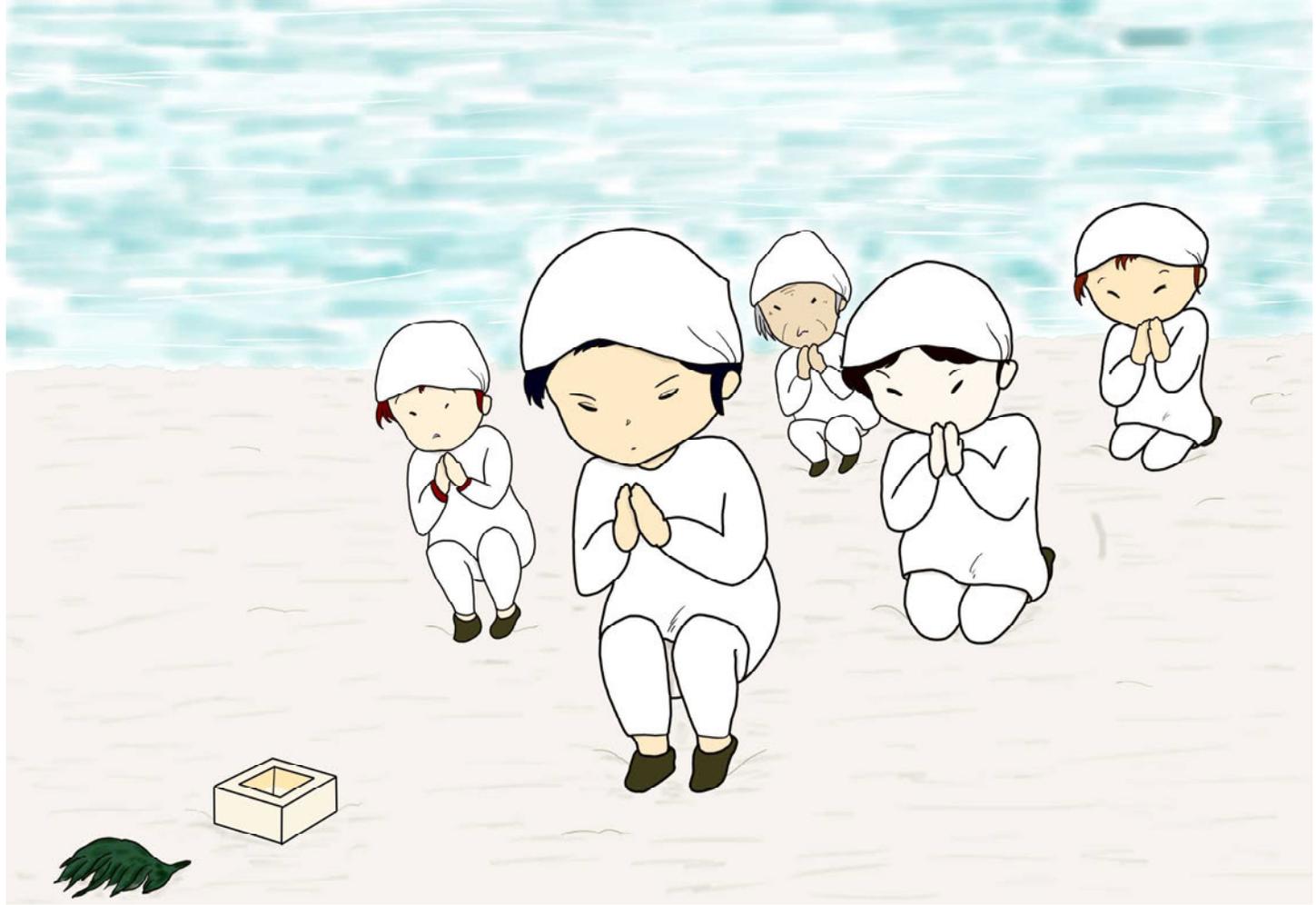


海女のおまじない

海女の着衣ちやくぐいや頭にかぶる手ぬぐい、あるいは使っている道具に、とある記号が描かれていることがあります。

それは「セーマン」と「ドーマン」と呼ばれるものです。二つとも災難からのがれるための「おまじない」なのですが、星形の「セーマン」は、一筆書きで元の場所に戻ることから、無事漁から帰ってこられるよう願うもので、格子目こしめの「ドーマン」は、たくさんの眼（格子）で魔物まものを追い払う力があるとされています。

海女が恐れる魔物に、「トモカヅキ」というものがあります。「トモカヅキ」は、海中にもぐっている海女本人とそっくりな幽霊ゆうれいが現れ、その誘いびよにのった海女を海の底へ引きずり込むといわれています。

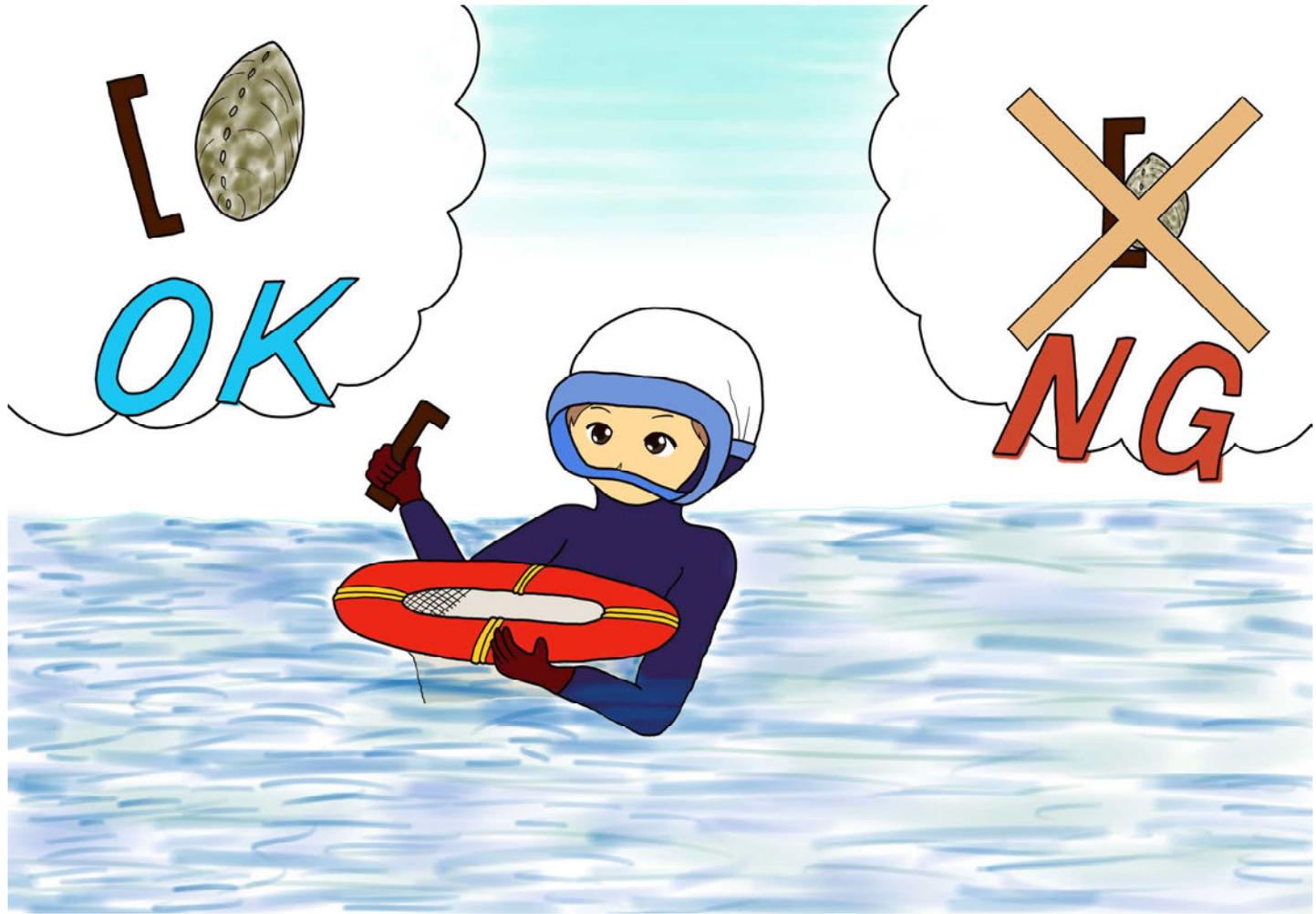


海女の祈り^{いの}

海女の獲物は、自然の恵みです。豊漁や安全を祈り、海女たちは一年を通じて信心深く、神様への感謝をささげるおまつりや信仰^{しんこう}を続けてきました。

「口明け（くちあけ）」と呼ばれる、その年の最初の漁の日には、浜辺に祭だんを設けて海に祈りをささげます。また、「ゴサイ」という、旧曆^{きゆうれき}の六月二五、二六日にあたる日には漁に出ない、などのタブーもあります。

鳥羽・志摩の各地区には、海女たちが主役となる多くのお祭りがあります。



LOOK

~~X~~
NG

資源しげんの保護ほご

海女はなぜ、今でも素もぐりで漁を続けているのでしょうか。これには大事な理由があります。

海女たちは、資源ともいえるアワビなどの貝を、獲り過ぎないようにしています。息継ぎをしなければ作業ができない海女の漁は、アワビを獲り過ぎるのを防ぐのに適しているのです。

また、「スンボ（寸棒）」という道具を使い、一〇・六センチより小さいアワビは逃がすなどの約束ごとももうけ、資源の保護に努めています。

ウェットスーツは、体を保護し、冷たい海の中での作業を楽にしましたが、海にもぐる時間の制限や、スーツの厚さを細かく取り決めるなども行われ、長時間、アワビを獲り続けられないようにしています。



海女のこれから

大昔より続けてきた海女の素もぐりの漁ですが、その従事者は年々少なくなってきました。

今も海女を続けている人たちも、六〇歳を超える方が多く、跡を継ぐ若い人たちが少なくなっています。

また、資源の保護に努めていても、海の環境の変化などもあって、アワビは少なくなってきているそうです。

海女のもつ技術や習俗しゆじゆくは、文化財でもあります。将来に海女漁を残していけるよう、皆さんの応援もよろしくお願いします。

(おしまい)